

# 2023 年度日本語教育学会 学会賞 受賞コメント

浜田 麻里（京都教育大学・教授）

このたびは日本語教育学会から学会賞という大きな賞をいただくことになり、大変光栄なことと感じています。

最初に学会賞に決まったとのご連絡をいただいたときは、私にとっては青天の霹靂の驚きでした。めざましい研究業績があるわけでもなく、学会全体を先頭に立ってリードしてきたわけでもありません。なぜ私のような者が？…辞退すべきではとも思い「一晩考えさせてください」とお答えしてしまいました。

ただ、いろいろと思いをめぐらせるうちに、私のような活動してきた人間がこうして学会で認められるということに意味があるのかもしれないと思うようになりました。

私自身はこれまで国や地方自治体の行政、NPOの方々との仕事に多く関わってきました。また日常のほとんどは、「学校に日本語がわからない子どもが編入してきたが、人も予算もなく、どう支援したらいいのか」という学校関係者や地域の方と一緒に知恵を出し合うこと、「ただでさえ学校教員は過大な負担を負わされているのに、さらに日本語指導が必要な子どもが増えても、もう対応なんてできない」という学生達や先生方に対して、どんなメッセージをどう伝えればよいのかに悩むこと等々で埋め尽くされています。

今回は、同じようにそれぞれの現場でがんばっておられるみなさんを代表して私が受賞させていただくのだと考えています。たくさんの方々をつながりながらそういった実社会の課題と格闘してきたみなさんの歩みを、日本語教育学会の「人をつなぎ、社会をつくる」という使命を踏まえて評価して下さったのだとすれば、これは本当に誇らしいことだと感じます。

また、私が社会の問題の重要性に気付き、このような活動に足を踏み入れることになるのには、恩師、同僚、仲間、外国にルーツを持つ子どもから大人まで、さまざまな方々との出会いがありました。ここまで私を導いて下さった方々にこの機会をお借りして感謝の気持ちを表すことができることも大変うれしく思います。

いま日本社会は大きな転換期にあります。今年4月から日本語教育機関や日本語教員に関わる新しい制度が始まりましたが、これは社会から日本語教育への大きな期待が形となったものだと捉えています。この期待を受けて立ったうえで、さらに、私たちの使命である「人をつなぎ、社会をつくる」を果たしていくにはどうすればよいのか。学会の真価が試されるのは、いよいよこれからです。私自身、自分ができることにこれからも精一杯取り組んでいきたいと思っています。

会員のみなさま、これからもどうぞよろしく願いいたします。



# 2023 年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

櫻井 千穂 (大阪大学・准教授)

この度は「日本語教育学会奨励賞」という荣誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。受賞のご連絡をいただいた際には、驚きとともにこれまでの研究活動を評価いただいたことに身の引き締まる思いがいたしました。私の研究は、多くの人々のご支援とご協力なくしては成し得ないものであり、お力添えをいただいた皆様に心より感謝申し上げます。

お礼の言葉に代えて、受賞理由に挙げていただいた『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』(2018)のあとがきに掲載した一人の少女とのエピソードを紹介します。

20年ほど前、ペルーから来日したばかりの7歳の少女に出会いました。当時、私は学校などで南米スペイン語圏ルーツの子どもたちの支援に携わっていました。彼女は言葉が通じなくても物怖じせず、大きな瞳が印象的でした。私にスペイン語が通じるとわかると、「¡Oye, Profesora! (ねえ、聞いて、先生!）」と好奇心たっぷりに話してくれるおしゃべり好きの子でした。学校生活にもすぐに慣れ、友達もでき、たちまち日本語も上達するかに思えました。

しかし、2ヶ月後、学年が上がり、「みんな平等」「特別扱いをしない」というクラスの雰囲気の中で、彼女は徐々に自身の色を失っていきました。ある日の国語の授業で「めずらしいもの」を紹介する課題が出されました。取り出し教室で一緒に勉強する通訳者の私に、彼女は「ゆき、ゆき、ゆき!」と、来日して初めて見た雪の感動を伝えてくれました。しかし、その思いを日本語にして提出した私たちに向けられた反応は「今は冬ではないし、雪は日本の子どもたちにとってめずらしいものではない。だから発表に適さない」というものでした。

取り出し教室に戻り、最初から考え直すことになりました。彼女は「日本ではほかにめずらしいものはないけれど、ペルーならある」と、雨上がりの森で見た大きな蜘蛛の巣の話をしてくれました。雫の滴る蜘蛛の巣が日の光に照らされ、その美しさが目に浮かぶような素晴らしい描写力でした。次の週、発表の感想を聞くのを楽しみに学校に行きました。ところが発表はしなかったとのこと。彼女がつたない日本語で一生懸命書いた短冊は、教卓のプリントの山の一番下に埋もれていたのです。それはまるで日本社会の圧力に押しつぶされ、存在を忘れ去られた彼女自身のようなものでした。しばらくして、彼女は授業中に関係のない絵を描くようになり、9ヶ月後、母親が彼女をペルーに送り返す決断をしました。

マイノリティの子どもたちは、一人ひとり固有の物語を持ちます。しかし、マジョリティのレンズをかけることでそれが見えなくなったり、時には、最初からなかったものにされてしまいます。当時の私には、その声なき声を救い上げる知恵も力もありませんでした。

あれから約20年、出会った子どもたちは1,000人を超えました。それでも、子どもたちから教えられることばかりです。彼らの声に誠実に耳を傾け、未来に繋がる研究をしなければと常に心に刻んでいます。この受賞を励みに、さらに精進してまいりたいと思います。この度は誠にありがとうございました。



# 2023 年度日本語教育学会 功労賞 受賞コメント

遠藤 織枝 (にほんごの会企業組合・代表理事)

お知らせを頂いたときからずっと、落ち着かない気持ちでいます。自分がそれに値するとは全く思われなくて、本当に頂いていいのかとためらい続けています。立派な賞に値することは何もしていませんが、何かあるとすれば、多くの皆様よりもずっと長く日本語教育学会会員であり続けていることでしょうか。ほとんどの皆様がご存じない、この学会が誕生したころのことも知っています。



ちょうどわたしが東京でただ2校の日本語学校の1校、外務省の外郭団体の国際学友会日本語学校に就職したその年に、本学会の前身の「外国人のための日本語教育学会」が発足しました。就職したばかりで、「は」と「が」の区別もわからない全くのミソッカスでしたが、当時の校長の鈴木忍先生はじめ男性の先生方が、学会設立準備で忙しそうに、でも何かしら嬉しそうに会合など重ねておられたことをそばで見えていました。学会が誕生しても、役員の方々も雲の上の存在で、わたしには縁のないはるかな遠い世界でした。そのまま学会との距離は縮まることもなく、学会のために何のお役に立つ仕事をすることなく過ぎてしまっていました。

2009年の初めです。その前年からEPA(経済連携協定)の海外の看護師・介護福祉士養成のプロジェクトが始まっていて、日本語の壁がメディアを騒がせていました。介護福祉士の候補者たちは日本語ゼロからスタートして4年後の国家試験に合格しなければ帰国させられるという過酷な条件であることがわかってきました(後に1年延期が認められるようになりました)。

その2月、思い切って、当時の学会長の尾崎明人先生にmailを送りました。学会として何もしなくていいんですかと。尾崎会長は素早く判断して3月の会議にかけてくださり、会長直属の看護と介護の日本語教育研究のワーキンググループ(WG)を立ち上げてくださいました。

定年の時期でした。言い出しっぺでもあり、それまで多忙を理由に学会の仕事をいつもお断りしていた贖罪の意味もあって、WGのメンバーになりました。まず介護の国家試験問題に取りかかりました。介護の専門内容には触れられませんが、文の構造はできるだけ単純なものに、長い文章や、長い漢字語は切るように、文意がすぐ取れるように連体修飾句は減らすように、日常的な助詞を選ぶようになど、また、こうした問題文の改善のために問題作成委員に日本語の専門家を入れてほしいなど、厚生労働省に申し入れをしました。厚労省は日本語に関する改善点はほぼ取り入れ、問題作成委員会に日本語の専門家を配置するという画期的な決断を下しました。

介護の現場のことばも知るにつれて、たいへん特殊な用語が多いことがわかってきました。昼と夜のスタッフの交代時の申し送りのことばには「ハウシツ・カクセイ・リショウ・ニューミン・カイガン」など耳で聞いてわからない漢語が溢れていました。

日本語教育に長年携わってきて、日本語に興味を持った外国の人々が、途中で挫折していった例をたくさん見てきました。数ある言語の中から、せっかく日本語に興味を向けたのに、難しい漢字が多くて手に負えないと、諦めてしまった人をたくさん見てきました。理由は何であれ、日

本語に興味をもち日本語に向き合おうとした人々を、振り落としてきたのは、本当にもったいないことでした。看護や介護の仕事で日本を目指したのに、日本語のために志を果たせないとしたら、当の本人にとってだけでなく日本にとっても大きな損失です。そうした EPA で来日した人々を、日本語のせいで苦しめることのないようにと思いつけてきました。

わたしの日本語教育界への功労は今後にかかっています。年は取りましたが、まだ余力がある間は介護のことばの平易化に努めていきたいと思えます。超高齢社会です。働けるうちはもう少し働いて、長年お世話になった日本語教育界にもう少し貢献するようにとの注文と激励の意味で今回賞を授けていただいたのだと思えます。あとしばらく研究活動が続けられるよう精進したいと思えます。本当にありがとうございました。

# 2023 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

家根橋 伸子（東亜大学・教授）・山本 晋也（周南公立大学・准教授）

この度は『日本語教育』論文賞という荣誉ある賞を頂き、心より感謝申し上げます。予想もしなかったことでしたので、授賞連絡を頂いた時は実感が伴わず、少し間をおいてしみじみ嬉しさがこみ上げてきました。



拙稿は、2021 年度に科研費を得て開始した、外国人散住地域における外国人住民のライフキャリア意識とその日本語教育支援に関する調査研究に基づく報告です。近年の地域日本語教育体制整備の進展には目を見張るものがありますが、地方で暮らす私たちは、その進む方向と勢いの強さに言いようのない違和感を覚えておりました。市街



地から車を少し走らせると、セイタカアワダチソウの中に埋もれた田畑と家屋の跡が道の両側に延々と続くこの町で、外国人住民の暮らしと日本語教育は、いかに位置づけられているのだろうか。そして、そのあり様は国家として進められる体制整備の先に見据えられた姿なのだろうか。

本稿は、こうした違和感を出発点として、散住地域社会で外国人住民支援がどのように展開されているのかを「ローカル・ガバナンス」を枠組みに俯瞰的に描くことを試みました。そこで見えてきたのは、現在進められている国家保障としての日本語教育の構図とは異なる、地域の個人間の信頼をベースとしたガバナンスと、その中に位置づけられ、展開される地域日本語支援のあり方でした。ローカル・ガバナンスという日本語教育にとって目新しい枠組み・概念を用いることには不安がありましたが、それによって外国人住民を地域社会の関係性の中に取り込んでいくように展開される地域日本語教育の姿を描きだしたことを日本語教育学会の皆様へ評価頂けたことを大変嬉しく思います。

講評では、本論のフィールド調査という手法も評価していただきました。この手法と絡めて少し「拙稿後」について書かせていただきます。過疎散住地域の外国人住民対応ガバナンスは個人間の信頼がベースだと書きましたが、本調査もまた、信頼をベースに、インタビューに応じてくださった方から次の人へと、一人ずつ、一人ずつ繋いでいってもらわなければなりません。しかしこのように調査を少しずつ進めていく中で、よそ者だった私たちもまた、フィールドのX市の人たちと繋がっていくことになりました。今年2月、研究の終了にあたって、私たち研究チームと調査でお世話になった地元外国人支援団体の共催で、多文化共生と防災のワークショップ（研究メンバー・広島大学小口氏の実践）をX市で開くことができました。X市の方々を、今度は私たちがワークショップの場で繋ぐことができたことに、研究の意義を感じた時間でした。調査研究の社会還元の様子は様々ですが、受賞を励みに、地域社会に密着した実践としての調査研究をこれからも続けていきたいと思っております。

最後となりましたが、選考委員の方々、論考を深めてくださった査読者の方々、科研メンバーの広島大学小口氏、東亜大学帖佐氏の二人のサポートに感謝いたします。何より、X市の皆様へこの受賞をお伝えしたいと思います。

# 2023 年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

小林ミナ（早稲田大学・教授）

この度、2023 年度「学会活動貢献賞」を受賞いたしました。表彰を受けました 14 名を代表し、ひと言謝辞を述べさせていただきます。

2008 年の公益法人制度改革を受け、日本語教育学会が社団法人から公益社団法人となったのは 2013 年 4 月です。公社化当時、私は副会長としていくつかの委員会や WG を担当していましたが、どの議論においても「公益とは何か」「公益事業とは何か」が焦点のひとつになっていたように思います。公益事業とは「学術、技芸、慈善その他の公益に関する事業であって、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するもの」とされており、日本語教育はそれ自体が公益であることに議論の余地はないものと思われませんが、学会としてどのように合意を形成し、それを言語化し、発信していくか。理念体系の構築のために、何度も会議を重ね、何百、何千通のメールが飛び交いました。今回、同時に受賞された会員にも、当時の活動をともにした方々がいらっしや、常任理事会で合宿をしたことなどを懐かしく思い出しました。



私が学会に入会したのは、1980 年代の後半です。学部を卒業して、日本語学校の非常勤講師、ドイツ人銀行員の個人レッスン、中国帰国者の家族のためのボランティア教室などを掛け持ちしていた頃でした。入会したのは「明日の授業に役立つヒントがほしい」「大会に参加すれば何かを教えてもらえるのではないか」といった思いからでした。その後、運営に携わるようになると、参加の心持が「教えてもらえるかも」から「一緒にやろうよ」に変わっていったように思います。とくに印象に残っている学会活動は「1998 年秋季大会」「2012 年日本語教育国際研究大会 (ICJLE)」「財政検討委員会」の 3 つです。「1998 年秋季大会」では、当時勤務していた北海道大学において初めて開催校を経験しました。それまでも、春／秋季大会に参加したことはありましたが、開催校としての舞台裏の経験は驚きと苦労の連続で、それまでの開催校や事務局の皆様のご苦労を改めて実感するとともに、より一層の感謝の気持ちを持つようになりました。名古屋大学を会場として開催された「2012 年日本語教育国際研究大会 (ICJLE)」では、実行委員長を務めました。3,000 名を超える人が関わる国際大会の準備、運営を通じて、異なる背景、文脈を持つ方々との連携、協働の難しさ、醍醐味を実感したのを思い出します。また、「財政検討委員会」では、公社化を契機にこれまでの学会の 50 年分の財政収支を見直し、報告書をまとめるというミッションに座長として取り組みました。

「学会に育てていただいた」というのが偽らざる実感ですが、これまでの活動をこのような形で評価していただいたことに改めて感謝を申しあげると同時に、これまで一緒に活動してきた会員の皆様、常日頃サポートしてくださっている事務局をはじめ、学会活動をご支援くださっているすべての皆様に、この場をお借りして心からの御礼を申しあげます。本当にありがとうございました。